

パフォーマンス芸術教育における観劇実習の影響

—情報通信系学生を対象とした実践研究—

村松香織^{*1}・崔 一煥^{*2}

Abstract

The aim of this research is to conduct a questionnaire survey targeting students majoring in information and telecommunication engineering to study the educational effects of a theater experience lesson in dance elective courses. As a result of a questionnaire survey conducted after 32 students participated in a theater experience lesson, we obtained the following findings:

- 1) Generally, students were satisfied with the content of the lesson and had favorable impressions about the theater experience. At the same time, results showed that few students had an active interest in theatrical performance in their daily lives.
- 2) Approximately 80% of the participating students were motivated to participate in theater experience events in the future.
- 3) In response to an open-ended question about the effects of the theater experience, students answered that watching a dance performance in a theater was a good experience, or that the experience helped them understand the effects of watching a performance in a theater. These answers suggest that the students were affected mentally in various ways through the planning and experience of the theater experience lesson.
- 4) The theater experience lesson enabled students to learn and grow through processes that involved bridging for learning more than in ordinary classes. The lesson helped to bring out their independence and ability to communicate, thereby linking to the development of general competencies.

1 はじめに

21世紀は感性社会、映像情報社会という概念で捉えられる社会であり、これまでの正確性、客観性、伝達の迅速性を持った情報だけでなく、(情報を基盤において、主観的で曖昧な、しかも迅速性を要しないものが加わった)「豊かさやゆとり」の感性が重視される社会として発展する(芦葉, 1994)という。また、人々が趣味・教養・創作のための学習活動をする時代として、

*1 東海大学現代教養センター *2 東海大学高輪教養教育センター

真の豊かさを求めた生活を送り、芸術や舞踊に関する理解や要請も今後一層高まっていく（秋葉，1995）と述べられている。現在の社会では、情報の発信人となる環境は整備され、創作に必要な技術力を修得する必要性の度合いは、従来と比較して縮小されてきた。創造性を持った情報発信型人間（芦葉，1994）が育成されたならば、全くの異分野から芸術領域をはじめ多様な領域で、独自の創作を行い情報の発信人となることができるといえよう。従来の実践型スポーツから e-sports への発想転換、そしてその新たな文化・コミュニティの拡大発展（杉山，2005）から推測されるように、一見舞踊や芸術との関連が希薄と考えられる情報通信系の学生にとっても、舞踊との関わり方によっては、情報技術の発展の下、自らが創造性を持った情報の発信を行うことが可能な時代が来ていると推測される。これに伴って大学における舞踊教育の目標も、社会の多様化に対応した可塑的な内容が望まれるであろう。人間の創作は現象学の立場から、「人間の根源的な原始社会では、最初に創り出されるイメージはダイナミックなものであり、人間性の最初の客観化、つまり最初の芸術は、舞踏なのである（ランガー，1970）」と評されている。人間の根源的なイメージはダンス等に代表される動的な人間の動きであり、21世紀の情報を発信するためのイメージ創造の教育にとっても、舞踊やパフォーマンス芸術は「ダイナミックなイメージ」の客体として、適切な教材の一つと考えられる。

近年は、大学の大量化・ユニバーサル化による入学者層の変化や家庭環境の変化等（松本ほか，2010）に応じて、大学教育は多様な対応が求められる時代になったことは否めない。12学部（2015年）からなる本学の学部ごとの学生特性を、一般体育教育の視点から調査した結果によると、情報通信系学部所属の学生は、運動系・文科系クラブやサークル等への加入率が最も低く、大学生活において友人とコミュニケーションをとる時間は、少ない傾向にあった（松本ほか，2010）。2013年に行われた内閣府の若者への意識調査によると、我が国のデジタルコンテンツ・携帯ゲーム機器の普及率は、米国や韓国等の他国を大きく凌いでトップであった（内閣府，2013）。この流れから察すると、現在の情報通信学部では2010年の調査時よりも、デジタルコンテンツが学生に与える影響は一層強く、それに付随する行動的コンピテンス（汎用的技能能力）への何らかの対応は必要と思われる。

本学のみならず大学の一般的な傾向として、大学のユニバーサル化、国際的競争力、社会への貢献、教育の質の保証等、様々な教育結果が社会的に重視される傾向にあり、国内では具体的に社会人基礎力（経済産業省，2006）や学士力（文部科学省，2008）として指標が提示されてきた。従来知識重視型能力よりも、コンピテンスが求められる21世紀の社会では、産学連携の立場から見ると、情報通信人材の育成に関して、特にコミュニケーション能力、問題解決能力、組織行動能力の向上に関心が集まっている（河村ほか，2014）と報告されている。また、学生の学びと成長を引き出すためのラーニング・ブリッジングは、大学生活の中で複数の活動の関係を調整していく接続意識・行動を通した上で、人生・生活の形成の積極的関与と連結している（河井ほか，2012）。その活動は正課・正課外で、汎用的技能獲得に異なる役割を果たしている（山田，2010）。然るに、大学の学習は活動のバリエーションを増やし、各個人が興味を持つ活動を選択できるスタイルが、ラーニング・ブリッジング形成に有効と推測される。これらを考慮すると、大学授業では様々な学生資質に対応できるように、複数の活動を取り入れた

複合的な内容を構築することが求められるのかもしれない。

大学教育（もしくはそれまでの学校教育）において、コンピテンスの向上を目標とした芸術系鑑賞教育の実践報告（専門分野外の教育コンテンツを使用）は、近年国内外で多岐に渡っている。例えば、英国で実践された社会性獲得を目指した教育において、「文化的成長の機会の提供」はコンピテンス向上に効果的（武田，2008）と報告されている。同様に英国では、中学校におけるコミュニケーション教育や、いじめ防止のための教育プログラムの教材として、演劇が導入されているケースが報告されている（伊藤，2017）。米国では幼少期からの美術鑑賞教育が重要視され、将来のコンピテンスへの影響が示唆されている（渡辺，2015）。我が国では、小・中学校美術科の一環として鑑賞教育が展開される傾向にあり、学校と美術館との連携など、学校が社会へ働きかけることによって、実践が実現しつつある状況となっている（深沢，2017，茂木ほか，2018）。大学でも美術専攻（もしくは教職科目として履修）学生が同大学の非専攻学生を対象として鑑賞教育を実施するなど、地域美術館を拠点として、専攻学生のコンピテンス向上と、鑑賞教育の実践が展開されている（小野，2006）。新しいアプローチの一つとしては、大学初年次教育として「デジタル表現技術者養成プログラム」の選択科目に、演技等の要素を取り入れた身体表現技法を用いることによって、学生のコンピテンス獲得を目指した報告（古賀ほか，2014）も挙げられている。上記芸術系のコンテンツを用いた実践は、歴史的には浅いものの、ここ数年に渡って事例の報告は増えつつある。その一方で、舞踊をメインの題材にした事例、特に芸術・体育分野を専門としない大学生を対象として実施された、ダンス授業および観劇実習に関する研究報告は、これまでにない。

以上より本研究では、舞踊理論-ダンス実技-観劇教育（学外での観劇：社会との接点を持つ体験的授業の実施）を通して、複合的な教育的影響を調査した。鑑賞教育としてのパフォーマンス芸術が、学生のコンピテンスへ影響することを期待して、情報通信系学生へ向けた新しい授業形態を模索することを目的とした。今回は観劇実習と、パフォーマンス芸術に関する受講生の意識調査の結果を中心に報告を進めた。

2 方法

2.1 調査方法：観劇実習とパフォーマンス芸術に関する意識調査

2015年度に本学情報通信学部で開講されたダンス選択科目の受講生（そのうち実習への参加希望者）を中心に観劇実習を企画した。観劇実習当日の学内集合時に、「観劇実習とパフォーマンス芸術に関する意識調査」を実施する旨の説明を行った。無記名調査であること、学業成績や単位修得には関係がなく調査への参加は任意であること等について説明を行った。実習終了後、任意回答を希望した学生には、調査用紙の同意チェックボックスにチェックをさせた上で回答をしてもらい、質問紙用紙回答を回収した（東海大学人を対象とする研究：15099）。調査は集合調査法で行い、参加者 32 名中 100%の有効回答を得た。得られたデータは、Microsoft Excel 2013 for Windows を使用して単純集計を行った。

2.2 質問項目

本調査の質問項目は、観劇実習に関して学生の主観的な意見を得ることを目標に設定した。設定にあたり、これまでに体育関連の教養科目授業で使用された質問紙調査項目（花岡ほか、2013、斎藤ほか、2016、Saito ほか、2016）、舞踊関連（中村ほか、2000、武井ほか、2000、村松ほか、2013）、美術観賞関連（小野、2006、茂木ほか、2018）を参考とした。質問項目は表1の通りとした。属性以外のQ4～11は選択記述式（5件法）、Q12およびQ13は自由記述式の回答とした。また初回授業の終了後と最終回授業の終了後には、任意の学生を対象に、パフォーマンス芸術に対する現在の自分の考えや意見を記述してもらった。

表1 質問項目

質問	内容
Q1	属性：性別
Q2	属性：学年
Q3	属性：運動・ダンス・音楽歴等について
Q4	これまでににおける劇場でのパフォーマンス芸術作品の観劇経験について
Q5	観劇当日の実習所要時間について
Q6	観劇当日の開催時間帯について
Q7	実習内容(作品・公演を含めて)について
Q8	開催会場(劇場・アクセス等)について
Q9	通常、パフォーマンスは何で観ますか
Q10	今後、機会があれば実際に公演を観に行きたいと思いますか
Q11	今後同様な演目の観劇イベントが実施された場合、参加したいと思いますか
Q12	今回の実習に参加した感想
Q13	その他、気づいた点、観劇実習内容への要望等

2.3 観劇実習に関する補足説明

2015年12月に東京都港区J劇場においてダンスミュージカル作品「コンタクト」を観劇した。鑑賞作品は純粋なバレエ作品ではないが、バレエの技法体系がベースとなるダンスが多用されていた。また、バレエ以外にもジャズダンスやスイング等の多様なダンスを比較鑑賞ができること、その他の要素として開催場所や公演時間等を考慮した上で決定された。

本実習と連携した授業は、ダンスの選択科目であった。授業内容のスケジュールは表2の通りとした。ガイダンス時には学生に対し、本授業では①舞踊（バレエ等）の理論、②実技、③観劇実習を3つの柱として実施することを説明した。授業最終回には、舞踊理論を中心とした全体発表会を実施し、グループワークとしてプレゼンテーション（グループ単位で調査したパフォーマンス芸術作品の紹介）を行うことを周知した。尚、典型的な90分授業の時間配分は、舞踊理論：約30分、実技：約30分、観劇実習に向けての活動（観劇教育）：約20分とした。

表 2 スケジュール概要

授業回	内容項目		
	舞踊理論	実技	観劇教育
1	ガイダンス		
2	中世の舞踊と宮廷バレエ	ストレッチ	劇場・催し状況の調査
3	劇場バレエとロマンティック・バレエ	ストレッチ・バーレッスン	演目・日程・座席等の調査・決定
4	ロシアのクラシックバレエ	ストレッチ・バーレッスン	鑑賞作品研究
5	モダニズムとバレエ	バーレッスン・センターレッスン	鑑賞作品研究
6	ポストモダニズムと舞踊	バーレッスン・センターレッスン	劇場研究
7	ディスカッション1	マイム	劇場研究
8	作品鑑賞	ヒップホップ(基礎ステップ)	小レポートの作成
9	作品鑑賞	ヒップホップ(応用ステップ)	研究内容の発表準備
10	作品鑑賞	ヒップホップ(コンビネーション)	研究内容発表
11	ディスカッション2	小発表会	(観劇実習実施)
12	プレゼンテーションに向けた調査(作品紹介)		
13	プレゼンテーション準備		
14	全体報告会・まとめ		

2.4 舞踊理論、実技、観劇教育の内容・連携について

本実習および授業は、履修者の大半が情報系を専門とした学生であった。この受講生は、パフォーマンス芸術に隣接した芸術や体育関連の学部所属ではないため、1回の授業で行う内容には、舞踊理論・実技・観劇教育の凡そ3項目を取り上げる工夫をした。舞踊の専門性を高める教育よりも、パフォーマンス芸術を俯瞰し、本授業で得た知識や体験を将来の自分の専門に繋げられることを目標とした。

①舞踊理論について

舞踊理論で取り扱った内容は、観劇実習当日の作品鑑賞のみならず、今後における一般的な舞踊やパフォーマンス芸術作品の鑑賞に役立てることを目標とした。バレエを中心とした舞踊史とその当時の社会・文化とのつながりについて学習をさせ、ディスカッションを行った。授業の最終回には、これまでの授業で行った学習・活動内容の総括として、グループ単位で自らが選択した「パフォーマンス芸術作品の紹介」について、Microsoft PowerPoint を使用してクラス全体に向けて発表をさせた。

②実技について

ダンス実技(バレエ)では、受講者の大半が初心者であったことから、ストレッチやバレエとしての身体使いの学習に主眼をおき、基礎的なバーレッスン、センターレッスンを行った。またバレエマイムなど表現に関連する動きの学習から、バレエ作品上の演劇的要素やストーリー展開の理解の方法を学ばせた。

また、平成21年度以降、中学校保健体育科授業におけるダンス教育が必修化されたこと(文部科学省, 2008)を考慮し、今回は大学教育以前に受講者が学習した経験が高い「現代的リズムのダンス」の一部としてヒップホップダンスを取り上げた。本授業以前に多くの学生が経験した基礎ステップをはじめ、応用ステップ、簡単なコンビネーション等を組み合わせ、最終的にクラス内発表会を行った。

③観劇教育について

学内における観劇教育(観劇実習に向けての活動)としては、観劇実習の企画を進めさせる

パフォーマンス芸術教育における観劇実習の影響

と同時に、パフォーマンス芸術の歴史、脚本、作品の内容と構成、劇場の仕組み、作品鑑賞方法等について授業内講義を行った後、グループ単位で鑑賞対象作品や劇場について研究をさせ、その結果を小レポートとして作成させた。その後クラス内発表会を実施した。

第2回から第11回まで毎回の授業では、①舞踊理論、②実技、③観劇教育の3分野の内容項目を取り入れ、3つの観点から授業を展開した。最終回には、上記①の内容を中心に総括として全体発表会（グループプレゼンテーション）を行った。

3 結果および考察

3.1 参加学生の基本情報

設問（Q1：性別、Q2：学年）の結果、参加学生は男子75%（24名）、女子25%（8名）であった。2015年度の当学部の男女構成（男子：約7割、女子：約3割）から察すると、ほぼ男女の偏りなく本授業への参加が行われたと考えられる。参加者の所属学年は1年生：53.1%（17名）、2年生：40.6%（13名）の構成で全体の9割以上を占めていた。低学年に向けた授業運営が妥当と考えられた。

3.2 スポーツ・ダンス - 音楽パフォーマンス等の経験について

設問（Q3：学校授業以外のスポーツ・ダンス・音楽・パフォーマンス等の経験について、複数回答可）の解答を分類した。スポーツ系種目では水泳、サッカーの経験者が最も多かった（各7件）。続いてバドミントン、卓球、バスケットボール、テニス、空手等であった（各2件）。経験年数は、平均6.07年、最高10年であった。パフォーマンス系種目では、音楽の経験者は10名で（主に吹奏楽：3名やピアノ：5名）平均9.8年、最高18年、ダンスの経験者は6名（バレエ：3名、ヒップホップ：1名、エアロビックダンス：1名、日本舞踊：1名）平均7.8年、最高11年であった。今回の参加学生は特定の種目経験に偏ることはなく、様々な運動やパフォーマンス経験を持った集団であることが分かった。運動系種目と比較すると、音楽やダンス等のパフォーマンス系種目の経験者には、継続期間が長い者がみられた。小・中学校および高等学校時代には（もしくは大学生現在に至る）、学校の授業時間以外にスポーツや音楽・ダンス等への活動を自主的に行っていた学生が大半で、自発的な授業外活動を持たなかった者は1割未満（2名）であった。

3.3 ダンス、ミュージカル等の観劇経験について

設問4（劇場におけるダンス、ミュージカル等の観劇経験について）の結果を図1に示した。「ほとんどいったことがない」と回答した学生が最も多く約半数の44%（14名）であった。続いて「ときどきいく」が28%（9名）、「あまりいかない」が22%（7名）であった。頻繁に劇場へ通う者は1名、全くの観劇初心者も1名であった。これらから約7割の学生は、これまでの日常生活において劇場への意識があまり高くないにもかかわらず、今回のような観劇の機会があれば自主的に参加する意思があることが分かった。

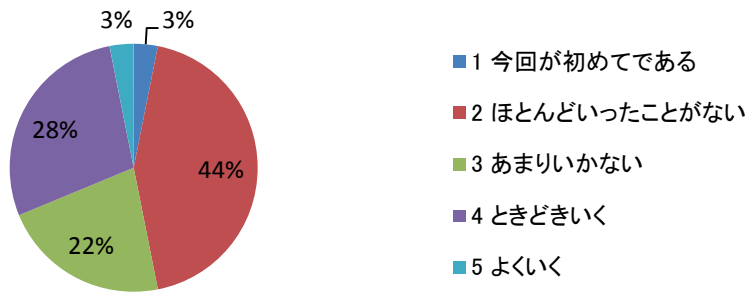


図1 ダンスミュージカル等の観劇経験について

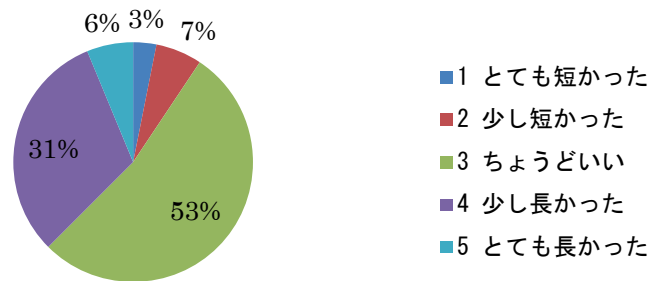


図2 観劇実習の所要時間について

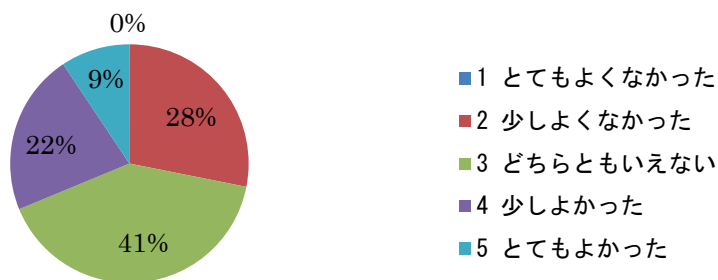


図3 観劇実習の開催時間について

3.4 観劇実習の所要時間について

設問5の結果を図2に示した。観劇実習の全所要時間として集合から解散までの約5時間を「ちょうどいい」と回答した者は半数以上53%（17名）であった。「少し長かった」と回答した者は31%（10名）、「とても長かった」と回答した者は2名であった。約半数の学生は観劇実

習に興味深く参加できたと考えられる。大半の参加者は1, 2年生であり、午前中から通常の授業に出席していた。今回は観劇実習を平日の授業終了後に開催したことが、少し長かったと感じさせた要因の一つだったのかもしれない。

3.5 開催した時間帯について

設問6の結果を図3に示した。開催時間に関して「どちらともいえない」と回答した者が最も多く41%（13名）であった。「少しよかった」と回答した者は22%（7名）、「とてもよかった」が9%（3名）となった。全体の7割程度の学生にとって、今回の実習は非常識な時間帯の開催ではなかったと考えられる。一方で、「少し良くなかった」と回答した者は約3割いた。実習開始時刻が17:00（通常授業終了後）となるために、終了時刻が21:00を超え、普段の授業時よりも終了時刻が大幅に遅れたことが理由と考えられる。

3.6 一連の観劇実習活動に関する満足度について

設問7の結果を図4に示した。一連の観劇実習活動に関する満足度について、「とてもよかった」と回答した者が60%（19名）、「少しよかった」と回答した者が23%（8名）であった。半数以上の学生は、観劇実習を目標とした一連の観劇教育の活動内容（下調べ、観劇の選定、実習企画、作品・劇場調査、調査発表会、小レポート作成、観劇参加等）に満足したと考えられる。

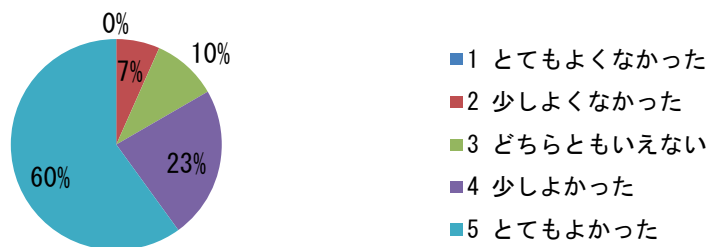


図4 観劇実習活動に関する満足度について

3.7 開催会場について

設問8の結果を図5に示した。開催会場について「少しよかった」と回答した者が66%（21名）と最も多く、「とてもよかった」と回答した者が28%（9名）であった。開催地は大学から30分以内のアクセス（電車を含む）が可能な近距離の劇場とした。これに関して参加学生は、移動を含む大学キャンパス外の開催であっても、概ね全員が満足していたことが分かった。

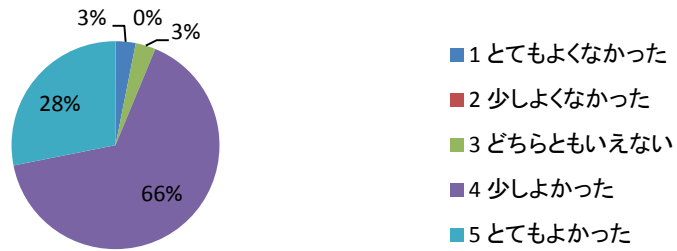


図 5 開催会場について

3.8 パフォーマンス芸術の鑑賞形態について

設問 9 の結果を図 6 に示した。日常生活におけるパフォーマンス芸術（音楽・ダンス等）の鑑賞形態は、「テレビ」と回答した者が 60%（19 名）で、次に「インターネット」と回答した者が 17%（5 名）であった。「普段は観ない」という学生は 13%（5 名）であった。2 名が劇場で観ると回答していたが、一般的にパフォーマンス芸術を鑑賞するにあたって、劇場は学生にとって身近な存在ではないことが伺えた。

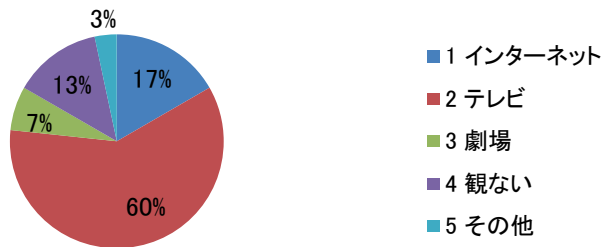


図 6 パフォーマンス芸術の鑑賞形態について

3.9 今後の観劇希望について

設問 10 の結果を図 7 に示した。今後、機会があれば公演を観に行きたいと思いませんか、という問いに対して「とても思う」（44%：14 名）と「少し思う」（38%：12 名）と回答した者が、それぞれ約 4 割であった。つまり、今後機会があれば「またパフォーマンスを実際の劇場で観劇したい」と感じている者が、8 割以上いることがわかった。今回の観劇実習では、総じて学生に観劇やパフォーマンス芸術に対して、好印象を持たせることができた。将来に向けて、学生自身が自主的に観劇活動を行うことができるような、ポジティブな観劇教育の影響を与えた可能性が伺えた。

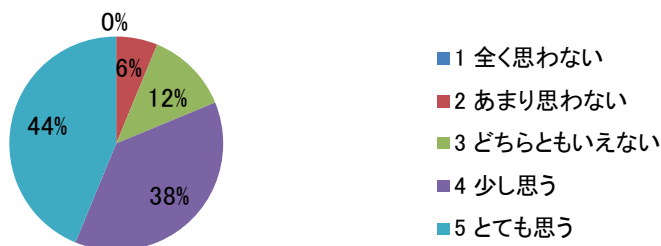


図7 今後の観劇希望について

3.10 今後の観劇イベントへの参加意識について

設問11の結果を図8に示した。今後も今回のようなイベントが実施された場合、参加したいと思いませんか、という問いに対して「少し思う」と回答した者が約半数（53%：17名）、「とても思う」と回答した者が約3割（31%：10名）であった。設問10の結果とほぼ同じ人数が、今後の観劇イベントに参加したいとの意向を示していた。今回の参加者の8割以上は漠然と観劇を希望するのではなく、実際に自分の行動範囲の中に観劇イベントが実施された場合、自主的な参加意欲を示す可能性があることがわかった。今後は、教養教育の一環として、学生のポジティブな観劇イベントへの参加意欲に対応できるような授業形態（イベント企画・参加型教育等）が構築されるとよいのかもしれない。

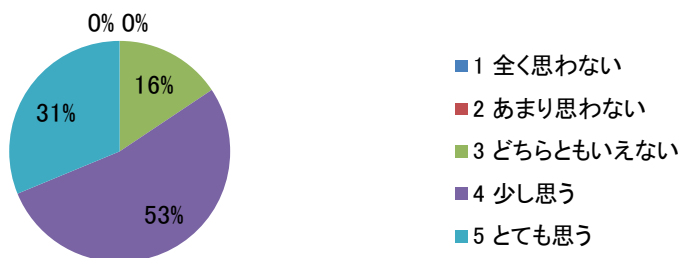


図8 今後の観劇イベントへの参加について

3.11 観劇実習に参加した感想について

自由記述の設問（Q12：観劇実習に参加した感想）では、総じて今回の実習のプラス面に関する感想が多かった。件数の多かった感想内容を①～④の項目にまとめた：①観劇実習の良い経験としての認識、②実際の劇場における観劇効果の実感、③パフォーマンスのイメージ、④観劇実習の授業形態。

①観劇実習の良い経験としての認識について

その中で最も顕著であった内容は、①「観劇実習の良い経験としての認識」についてであつ

た(12件)。「またの機会があれば参加したい」という観劇実習へ対する前向きな感想は、上記回答者全員(実習参加者全体の約1/3)から得られた。さらに「自分一人では観劇に行きづらい」「次の機会が設定されていないことを残念に思う」や、「次回は自主的に観劇に行きたい」などの意見が挙げられていた。

②実際の劇場における観劇効果の実感について

次に件数の多かった感想(10件)は、②「実際の劇場における観劇効果の実感」についてであった。「インターネットの動画等、間接的にパフォーマンスを観た場合と全く異なる迫力の実感」「良いパフォーマンスを身近で実際に観ることによるパフォーマンスイメージ構築の学習効果」「ストーリーや演出・構成等の工夫への実感」等であった。「学内授業で劇場舞台の構造を学んだが、実際の幕・場の展開に(舞台の奥行やトラップ、袖幕の位置が)こんなにも活用されて効果的とは思わなかった」との感想に表わされているように、本授業では観劇実習に先立って予め学内授業で基礎学習(観劇リテラシー)を行ったからこそ、参加者は実際の舞台を観てパフォーマンスへの理解を深めることができたと推測される。例えば「自分は確実に、その場面の中において〇〇役の人と見つめ合って、自分の心が動くのを感じた。」という感想例に示されるように、参加者は基礎的な舞台の理解に加えて学内学習内容(ストーリー、劇場・舞台の仕組み、表現を伴う動きの意味等の理論学習や動画映像、ダンス実技等)からでは得づらい、感覚的な事象を劇場で体験していた。参加者の約1/3は、実際の舞台でのみ受け取ることが可能な、パフォーマンスへの直接的な体験(「観客と演者の共感」や「劇場全体の醸し出す一体感としてパフォーマンス全体のイメージを持つ」等)を通して、総括的なパフォーマンスイメージを持ったことが伺えた。

③パフォーマンスのイメージについて

7件の③「パフォーマンスのイメージ」について、パフォーマンスから受ける「抽象的なイメージ」や「間」に関する感想等が多く挙げられた。「今回の作品は演劇的要素(セリフ)が少なく、踊りがメインのパフォーマンスだったので、開幕直後はストーリーやメッセージを理解できるか不安だったが、公演が進むに従って内容はわからなくてもいいことに気づいた。なぜならメッセージに正解はなく、現在の自分が創りあげるイメージが、リアルなメッセージだということ学んだから」という感想が得られた。受講生はプロフェッショナルな舞台を実際に観ることによって、パフォーマンスから自分の捉え方で作品へのイメージが深められた可能性が示唆されていた。

④観劇実習の授業形態について

6件の④「観劇実習の授業形態」については、「学外授業の新鮮さ」「皆で観劇実習の企画を遂行することに対する楽しみや緊張」「グループワークの困難さ」「多種のワークを通じた受講生同士の連携強化」等について述べられていた。今回の観劇実習(これへ向けた活動や学習を含む)では、受講生による自主的な企画活動が多く、教員の予想以上に学生自身は、企画遂行に対する責任感を感じていたことが読み取られた。また数件の記述から、学生の年代にとって公演チケットの価格は高価という認識を持たざるを得ないことが示唆される。

3.12 観劇実習内容への要望等について

自由記述の設問(Q13) 観劇実習内容への要望等について得られた回答には、今後の観劇実習の企画・実施を希望する記述「同様な観劇実習の企画があったら参加したい」が計 15 件あった。参加者の約半数が自由記述欄に、次回の観劇実習企画を希望していることから、設問 10 の結果と同様に、体験実習を取り入れた授業形態の構築は将来的に有効なのかもしれない。

10 月の授業初期に観劇作品を選択する段階では、バレエ作品よりも作品意図のわかりやすい一般向けの作品を希望した学生が大半であったため、今回はダンスミュージカル作品を鑑賞した。大学生を対象とした舞踊作品鑑賞に関する先行研究によると、一般的に大学生は作品意図がわかりやすい作品に対して高く評価する傾向がある(江田ほか, 2012)という。観劇実習後は「次回はバレエ作品の鑑賞をしたい」という意見が 11 件(全体の約 1/3) 挙げられた。「芸術というものへのハードルが下がった」「これまで自分の身近になかったダンス作品に興味を持てるようになった」等のプラス評価の感想が得られた。今回の実習では、参加学生のパフォーマンス芸術への関心領域の拡大や、学内授業・舞踊理論等の学習の影響が伺えたといえよう。

3.13 パフォーマンス芸術に関する意識変化

初回の授業と最終回の授業が終了した後、任意の学生を対象に「パフォーマンス芸術に対する現在の自分の考え・意見」を記述してもらった。その際、最終回の全体発表会に向けた一連のプレゼンテーション活動(準備・ミーティング等を含む)についての意見も述べてもらった。初回と最終回の意見を元に、受講生の意識変化を表 3 に示した。初回と最終回の両方で任意回答を行った者は、27 名(男子: 19 名, 女子: 8 名)であった。得られた意見を 6 つのカテゴリーに分類した: 1) パフォーマンス芸術との関わり, 2) 身体文化・身体動作, 3) パフォーマンス芸術と社会・歴史的つながり, 4) パフォーマンス芸術的な視点, 5) パフォーマンス芸術と実生活の関わり, 6) プレゼンテーション活動。各カテゴリーでは、具体的に以下の項目/意見が挙げられた。

1) 「パフォーマンス芸術との関わり」について

初回と最終回共に、「①パフォーマンス芸術に関心がある」と「②パフォーマンス芸術を楽しむことができる」の内容を約 8 割の学生が言及していた。最終回には「③パフォーマンス芸術を理解している」「④パフォーマンス芸術の創作的活動を行うことができる」の意見が新規に挙げられた。特に②③④では各 5 件以上意見数が増加し、パフォーマンス芸術を「理解して」「楽しみ」自らの「創作的な活動」につなげる力が養われた可能性が伺えた。

2) 「身体文化・身体動作」について

パフォーマンス芸術の身体文化や身体動作に関して、初回はほとんど意見が挙げられなかったが、最終回では「⑤身体文化に関心がある」「⑥身体の動きの仕組みに関心がある」等の意見が顕著に増加し、両項目では 8 割程度の学生が言及していた。学生はこの実習を通して、身体文化や身体動作への考えを持つようになった可能性が推測された。

表 3 学生の意識変化

カテゴリー	項目	初回	最終回	新規	増加
1 パフォーマンス芸術との関わり	① パフォーマンス芸術に関心がある	○	○		
	② パフォーマンス芸術を楽しむことができる	○	○		○
	③ パフォーマンス芸術を理解している		○	○	○
	④ パフォーマンス芸術の創作的活動を行うことができる			○	○
2 身体文化・身体動作	⑤ 身体文化に関心がある		○	○	○
	⑥ 身体の動きの仕組みに関心がある		○	○	○
	⑦ パフォーマンス芸術の動き(舞踊など)に関心がある		○	○	
	⑧ 身体文化を理解している			○	○
	⑨ 身体の動きの仕組みを理解している			○	○
	⑩ パフォーマンス芸術の動き(舞踊など)を理解している			○	○
3 パフォーマンス芸術と社会・歴史的つながり	⑪ パフォーマンス芸術の歴史に関心がある	○	○		○
	⑫ パフォーマンス芸術と社会の関連に関心がある		○		○
	⑬ パフォーマンス芸術と社会の関連を理解している			○	○
	⑭ パフォーマンス芸術の歴史を理解している			○	○
4 パフォーマンス芸術的な視点	⑮ パフォーマンス芸術のメッセージを複眼的な視点に活かすことができる	○	○		○
	⑯ パフォーマンス芸術から現代社会の問題点を見出すことができる	○	○		○
	⑰ パフォーマンス芸術のメッセージを自分の考えに活かすことができる		○	○	○
	⑱ パフォーマンス芸術からグローバルな視点で物事を理解することができる		○	○	○
5 パフォーマンス芸術と実生活の関わり	⑲ パフォーマンス芸術の作品を観てみたい(インターネットやテレビなど)	○	○		○
	⑳ パフォーマンス芸術の作品を観てみたい(実際のライブ公演など)	○	○		
	㉑ パフォーマンス芸術についてさらに学習・調査を行いたい		○	○	
	㉒ パフォーマンス芸術の活動をサポートしたい			○	
6 プレゼンテーション活動	㉓ 他人の意見に耳を傾け、内容を正しく理解することができる	○	○		
	㉔ グループ目標を達成する為に自分の役割を理解し、コミュニケーションを取りながら作業することができる	○	○		
	㉕ 適切な手段を用いてわかりやすいプレゼンテーションができる		○	○	○
	㉖ 解決方法を論理的に考え、手順を構築できる		○	○	○
	㉗ プレゼンテーション等の企画・計画を立て、スケジュール意識を持って行動することができる		○	○	○

初回 初回で多く得られた意見
 最終回 最終回で多く得られた意見
 新規 最終回のみで得られた意見
 増加 初回と比較して最終回で著しく増加した意見

3) 「パフォーマンス芸術と社会・歴史的つながり」についての意見

初回は「⑪パフォーマンス芸術の歴史に関心がある」の意見が、8割以上の学生から得られた。最終回は⑪に加えて「⑫パフォーマンス芸術と社会の関連に関心がある」という意見も多く挙げられた。⑬⑭の意見も増加し、授業を通して「パフォーマンス芸術と社会・歴史的つながり」に関する興味のみならず、理解も進んだ様子が伺えた。

4) 「パフォーマンス芸術的な視点」についての意見

初回は「⑮パフォーマンス芸術のメッセージを自分の考えに活かすことができる」「⑯パフォーマンス芸術のメッセージを複眼的な視点に活かすことができる」の意見が多く挙げられた。最終回では初回の項目に加え、「⑰パフォーマンス芸術からグローバルな視点で物事を理解する

ことができる」「⑱パフォーマンス芸術から現代社会の問題点を見出すことができる」等の意見が、新規に多数挙げられた。パフォーマンス芸術のメッセージと社会の問題点、グローバルな多様な視点等を、自分の意見に反映するための機会となった可能性が推測された。

5) 「パフォーマンス芸術と実生活の関わり」について

「⑲パフォーマンス芸術の作品を観てみたい(インターネットやテレビなど)」「⑳パフォーマンス芸術の作品を観てみたい(実際のライブ公演など)」の意見が、初回では多く挙げられていた。最終回では、全体の1/3程度ではあったが「㉑パフォーマンス芸術の活動をサポートしたい」「㉒パフォーマンス芸術についてさらに学習・調査を行いたい」の新規意見が得られた。初回に多数得られていた⑲の意見は、最終回には約9割の学生が言及していた。今回を契機に多くの受講生が、今後インターネットやテレビを介して、パフォーマンス芸術に触れる可能性が高まったのかもしれない。

6) 「プレゼンテーション活動」について

「㉓他人の意見に耳を傾け、内容を正しく理解することができる」「㉔グループ目標を達成する為に自分の役割を理解し、コミュニケーションを取りながら作業することができる」の意見が初回では多く得られた。最終回では、㉓の内容を9割以上の学生が挙げており、全体発表会へ向けたプレゼンテーション活動によって、他人の意見を適切に聞く力が向上した可能性が伺えた。また最終回は、初回の2つの意見に加えて「㉕適切な手段を用いてわかりやすいプレゼンテーションができる」「㉖解決方法を論理的に考え、手順を構築できる」「㉗プレゼンテーション等の企画・計画を立て、スケジュール意識を持って行動することができる」が新規に多数挙げられていた。その他にも一年次の学生から、「先輩方のプレゼンテーションの仕方が大変参考になった」という意見が挙げられた。「プレゼンテーションを行うという機会のお陰で作品の研究が進んだ」「発表時の準備不足の反省から、今後は準備を万全に行う習慣を身につける」

「PowerPointの作成等、プレゼンテーションの準備で自分の役割を果たすことができ、充実感を得た」等、プレゼンテーションは受講生にとって、グループメンバーとの協働的な活動を通じた学びの手段として有効であったと推測される。

7) その他

その他の意見として、学内授業(舞踊理論)で効果的だった活動(複数回答可)は、プレゼンテーション:17件、基礎学習:11件、個人レポートの作成:8件、予習-復習用ワークシートの作成:6件であった(上位5項目)。6の結果同様に、受講生のプレゼンテーションへの活動意識は高く示されていた。また、最終回には「本授業を通して将来に役立つ内容を学んだ」もしくは「授業の活動を通して自己成長を感じた」との意見が、全回答の約8割から得られた。

4 現状および今後の展望

4.1 観劇実習と学びについて

前田は著書「教育における芸術の役割」の中で、「(芸術の学びは)人間としての社会の一員として立派に生きていくことができるように、調和的に発達させるものでなければならない」

と示し(前田,1983),身の周りで携わる多くの活動要素を自らが複合的に結び付け,芸術の学びを深めることが大切と述べている。また学生の“学びと成長”には活動の実践を通して,学外授業と通常授業,またはそれに伴う幅広い分野の自主的な学習・活動が相互に架橋し,学生自らが学習内容を連鎖的に結び付けていくこと(ラーニング・ブリッジング)が重要であるという(河井ほか,2013)。今回の観劇実習では,実際に劇場へ訪れるまでの企画や準備等を行うにあたって,学生が主体的に参加を行った。その結果,通常の学内授業で学ぶ実技や理論の学習内容を超えて,学生の探求力,自主性,コミュニケーション力,プランニング力,実行力等のコンピテンス育成に繋がったと推測される。ダンス指導に関する報告によると,授業形態として「集団の中の個人」を対象とするよりも,グループ学習等の「小集団」を対象とした指導の方が,受講生にプラスの評価を与えることが認められている(伊藤ほか,2002)。今回は観劇実習の教育として,グループ単位の活動が多かったことは「パフォーマンス芸術を今後も実生活に取り入れたい」とのポジティブな意見を多くの学生から得た要因となったのかもしれない。

4.2 観劇実習と学内学習の結びつき

観劇実習の質問紙調査では,最後の自由記述欄に学内授業の内容との関連を記述する者が少なくなかった。例えば実技に関して,受講以前にバレエの実技経験や鑑賞経験が全くない学生達からは,「バレエマイムや簡単なバレエレッスン,ヒップホップダンスを行うのが楽しかった」「幼少期にバレエをやったことがなかったので,体育のスポーツとはすべてが異なり,新鮮な体験だった」との意見が挙げられていた。また,「自分の専門(理系)とは異なる分野の興味を開拓することができ,総合大学で学ぶメリットを感じた」などの意見が得られた。

本授業では,これ以前にピアノ・吹奏楽系の演奏等を比較的長期間に渡って音楽のトレーニングを受けていた者が比較的多かった(8名)。「バレエ作品で使用されていた音楽には,以前演奏したことのある曲が幾つか見つかり(白鳥の湖,ロミオとジュリエット,くるみ割り人形等),自分がこれまで演奏してきた音楽パフォーマンスと今回の舞踊の内容が繋がった」「今後も音楽を続けるので,音楽への表現方法が広がった」「今回はバレエを習ったが,音楽の理解も深められた」等,これまでの学生自身の実生活上の体験と,今回の学習内容が結びついたことが伺えた。その他にも「パフォーマンスと社会のつながりを考える力が養われた」「社会現象からメッセージを考え抜く力が得られた」「歴史的な流れと現代社会の現象は,深く関連していえることをダンスから学んだ」「異文化でコミュニケーションをとる時にお互いの理解を深めるツールとして,パフォーマンス芸術を利用したい」等,視野の変化や広がりに関する意見も挙げられていた。授業後半は,受講に応じて感受性が高まってきたことを認識したのか「作品鑑賞をもっとしたい」という声が増加した。総合芸術としてのバレエは,その特性上,多面的なアプローチ・解釈がし易い舞踊であり,鑑賞者の感受性があれば,それまでの自分の体験・知識に引き寄せやすい教材であることが伺えた。

4.3 芸術科目としての舞踊の位置づけ

一般に,学生が学校教育の中でダンスと接する機会は,体育科目実技である場合が多い。な

ぜなら舞踊は、我が国の現状として身体芸術でありながら、2012年度以降中学校保健体育科の教材の位置づけとして、「男女のダンス必修化（文部省、2012）」が行われているからである。今回の学内授業では10回（毎回約30分）の舞踊実技を行ったが、学生は新規に「舞踊実技を習いたい」「パフォーマンス芸術の『運動の実践』を実生活に取り入れたい」、もしくは「運動習慣や学んだ動作を実生活に活かしたい」という意見は現れなかった。その一方で、学生が受講後に本授業の学びから現在の実生活に活かすことができると考えた点は、「パフォーマンス芸術を通して社会を感じ理解する視点」「感受性」「プレゼンテーション技法」「コミュニケーション力」等であった。専門外の学生には、実技以外の内容が、今後の生活に取り入れられやすいことが伺えた。舞踊とは異なる専門を持つ学生には、体育実技としての要素に偏らず、基礎理論や学外での実習を含め、社会とのつながりを感じさせられるような授業を構築することが適切と推測される。学生にとって社会を知るツールとして、舞踊の基礎理論・実技・学外実習のバランスを取りながら、授業展開を行うことが望まれるのかもしれない。

4.4 観劇と客観的イメージの形成について

観劇実習後は、受講生から「次回はバレエの作品を見てみたい」という意見が得られた。受講前、男子学生からこの意見は全く挙げられなかった。一方で受講後は「白鳥の湖の作品鑑賞をしたい」という意見が、男女差なく多く挙げられた。ダンス実践とそのイメージに関する先行研究では、2000年頃から学生のダンスへの性差意識は中立に近づき、ダンスは表現的であると共に、活動的な運動分野として捉える傾向へと変化した（武井ほか、2000）という。また、ダンスの実技経験量が増加すると、受講生にとってダンスの性差的イメージは中立化する傾向にある（中村、2000）。今回の授業では、受講生は舞踊作品の鑑賞が進むに従って、ダンサーの性別を意識してその肉体的運動を鑑賞するというよりも、ダンサーの動きを抽象的にイメージ化していたことが推測される。これにより舞踊に対するジェンダー的な固定概念は薄くなり、男女差なく「白鳥の湖」の作品鑑賞を希望する傾向に変化したと推測される。ヒトの動きの模倣では、動きの「形」をそのまま「コピー」するのではなく、主体的な解釈の下、拡張的な「型」として身につける（朝岡、2005）という。受講生は本授業の実技や基礎理論の中で、各自が得た主観的事象を元に舞踊動作のイメージ化を行い、人間としての具象的な動きよりも、客観的イメージの「型」として舞踊動作を捉えるように変化したと推測される。言い換えると、舞踊動作をダンサーの肉体的運動として捉えるのではなく、ストーリー展開に対して、抽象的イメージを作る一つのパーツとしての客観的な動き（＝ダイナミックなイメージ）と理解したのではないだろうか。

21世紀はグローバリズムの時代であり、我々が直面する諸問題は前世紀よりも複雑・専門化し広大な分野に関連している。このような現代社会の問題に遭遇した時、その事象を客観的イメージとして捉え、つまり自分の身に引き寄せて問題にアプローチする能力は、学生のコンピテンスに大きく影響すると考えられる。情報通信系の人材にとっても、社会で各々の専門分野において自分の力を十分に発揮するためには、他分野や異文化との折り合いや理解が不可欠であることが予測される。そこで改めて、社会人を目前にしたこの時期、大学生としてのコンピ

テンスを得るために、舞踊・芸術分野から客観的イメージを創造する教育の一つとして、観劇・鑑賞教育は役立てられるのではないだろうか。体育専攻の大学生に鑑賞教育を施した場合、人間にとって舞踊の価値を認識し、身体の実験活動は人間の基礎的な創造活動として男女の区別なく体験することが望ましい、ということを確認していた（原田ほか, 1995）。舞踊鑑賞の受動性、気軽さは舞踊の実験を持っていない人、あるいは持とうとしない人の目を舞踊に向けさせるのに有効であるという（原田ほか, 1995）。舞踊・体育専攻でない学生や幅広い年齢・価値観・経歴の学生にも舞踊文化の豊かさを感じさせ、美的感性を育む手立てとして、汎用性と感受性が融合した教育の可能性を今後検討していきたい。

4.5 大学-学生-社会のつながり

情報系学生が専門外の分野を学ぶ場合、学生の学習到達レベルには個人差が大きく伴うという。一方で、たとえ入門程度の学習レベルの者であっても、異分野へ対する障壁感をなくすという視点からすれば大きな効果を奏する（柳田ほか, 2012）と報告されている。学生の専門外の学習に関しては、学習内容そのものよりも、それに付随する価値観や精神面の変化（異文化や多様性の理解等）を重要視すべきであろう。従来大学はシティズンシップ教育の中において、地域・社会へのコミュニケーションの促進、異分野間の壁を低くするコーディネーターとして、積極的に介入すべきポジションである（大野, 2005）という。実際に、米国ヒップホップ・カルチャーは都市のストリートで生まれ、1990年代の地元大学キャンパスにおいて、それ以前の年代の大人とは異なった気質の創造性豊かな学生が育んだ文化（チャン, 2016）である。そして21世紀現在も、その思想的な流れは失われていない。我が国でも芸術を利用した複数の分野間の研究例として、総合的アートセンターでは芸術のみを扱うのではなく、技術と芸術を横断するメディアテクノロジーを用いた新しい表現の模索等、新しい試みを行っている（津田, 2017）。演劇・舞踊等のパフォーマンス芸術分野では、一般社会との架け橋として、次世代の担い手であり活動力の高い大学生の共同参加や自主的な活動は、地域から強く望まれているという（永井, 2011）。今後は、大学という多面性を持つ立場から、舞踊教育における観劇・鑑賞教育をどのような内容・形で学生と社会を結び付け、教養を提供していくかという点において、慎重に検討していく必要があると考えられる。学生は現代のグローバル社会の一員として、21世紀型コンピテンスに加え、舞踊・芸術の教育によって目の事実や結果よりも、その事象に係る潜在的なイメージや社会の流れなどに対し、敏感に反応する感受性が養われえることが望まれよう。

5 まとめ

本研究は、ダンス選択科目で実施された舞踊理論・実技・一連の観劇実習活動による教育的な影響について、情報通信系学生の主観的な意識調査を行い、今後の教養教育の構築に活かすべく基礎資料を得ることを目的とした。その結果以下の内容が得られた。

1) 総じて学生は「観劇実習型授業」に対して好印象を持ち、約8割が今後における観劇イベ

パフォーマンス芸術教育における観劇実習の影響

ントへの参加意欲を示した。

2) 自由記述式感想では、「観劇実習の良い経験としての認識」「実際の劇場における観劇効果の実感」等が挙げられ、観劇の企画・体験を通じて学生には多様な影響が与えられたと考えられる。

3) 「観劇実習型授業」において、多数の学生は劇場という社会の一形態を通して、学内の基礎的学習と社会とのつながりを感じていたと推測される。

引用文献

- 秋葉尋子, 1995, 「VTRによる舞踊教育の問題解決に関する研究」, 『教育情報研究』, 11(2) : 31-36.
- 朝岡正雄, 2005, 「動きの模倣とイメージトレーニング」, 『バイオメカニズム学会誌』, 29(1) : 31-35.
- 芦葉 浪久, 1994, 「情報教育の論点」, 『教育情報研究』, 10(1) : 5-18.
- チャン:押野素子訳, 2016, 『ヒップホップ・ジェネレーション』, リットーミュージック:東京, 652-699.
- 江田梨紗, 茅野理子, 2012, 「創作ダンスの作品研究と鑑賞傾向に関する一考察—ソロー2作品を対象とした一般大学生の鑑賞傾向から」, 『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』, 35 : 189-196.
- 経済産業省, 「社会人基礎力」, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (参照 2018.10.12) .
- 花岡美智子, 萩裕美子, 吉岡尚美, 2013, 「大学生における体育の授業に対するイメージ学部別の特徴に着目して—」, 『東海大学紀要体育学部』, 43 : 77-82.
- 原田純子, 柴真理子, 1995, 「鑑賞体験による舞踊の認識に関する事例研究」, 『舞踊學』, 17 : 11-17.
- 伊藤嘉奈子, 2007, 「イングランドの中学校における Theatre in Education を用いたじめ防止プログラム」, 『鎌倉女子大学紀要』, 24 : 11-23.
- 伊藤美智子, 林信恵, 2002, 「教師行動と生徒による授業評価から見たダンス授業の検討」, 『体育学研究』, 47 : 333-346.
- 古賀崇朗, 青柳達也, 河道威, 米満潔, 角和博, 穂屋下茂, 2014, 「初年次教育におけるアクティブ・ラーニングの試み —「身体表現入門」の場合—」『佐賀大学全学教育機構紀要』, 2 : 83-90.
- 河井亨, 溝上 慎一, 2012, 「学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析 : 学習アプローチ, 将来と日常の接続との関連に着目して」, 『日本教育工学会論文誌』, 36(3) : 217-226.
- 河井亨, 木村充, 2013, 「サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割 : 立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて」, 『日本教育工学会論文誌』, 36(4) : 419-428.
- 河村圭, 今村哲也, 大島信幸, 2014, 「産学連携による大学生を対象としたロジカルシンキング

- 教育の導入と評価」, 『工学教育』, 62(3) : 5-18.
- 前田博, 1983, 『教育における芸術の役割』, 玉川大学出版部 : 東京, 128-131.
- 松本秀夫, 小河原慶太, 木村季由, 2010, 「東海大学生の生活習慣とメンタルヘルスに関する実態調査」, 『東海大学紀要体育学部』, 40 : 165-171.
- 文部科学省, 『中学校学習指導要領』,
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm, 72-84. (参照 2018.10.12).
- 文部科学省, 「武道・ダンス必修化」
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1330882.htm (参照 2018.10.12).
- 文部科学省, 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm(参照 2018.10.12).
- 茂木克浩, 茂木一司, 2018, 「中学校美術科教育におけるPBL型学習—「人DESIGN Project」の事例研究—」, 『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』, 53 : 25-35.
- 村松香織, 渡辺祐介, 2013, 「必修科目「健康・フィットネス理論実習」の点検—東海大学情報通信学部生の体育科目における自己評価—」, 『東海大学紀要情報通信学部』, 6(2) : 45-51.
- 永井聡子, 2011, 「地域の劇場モデルに関する考察—市民参加の可能性について—」, 『静岡文化芸術大学研究紀要』, 12 : 67-71.
- 内閣府, 「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」,
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b4_1.pdf, (参照 2015.9.12).
- 中村恭子, 武井正子, 2000, 「ダンスの学習過程におけるダンスイメージの変容に関する研究—体育系学生を対象として—」, 『比較舞踊研究』, 6(1) : 24-34.
- 小野文子, 2006, 「地域美術館との連携による鑑賞教育プログラム:「総合演習」におけるワークシート制作を通して」, 『信州大学高等教育システムセンター紀要』, 2 : 61-73.
- 大野 順子, 2005, 「地域社会を活用した市民的資質・シチズンシップを育むための教育改革: 地域の抱える諸問題へ関わることの教育的意義」, 『桃山学院大学総合研究所紀要』 31(2) : 99-119.
- ランガー, S. K., 1970, 『芸術とは何か』, 池上保太・矢野万里訳, 第5版, 岩波書店: 東京, 14.
- 齋藤晃一, 村松香織, 2016, 「「体育あそび」を用いた多世代間コミュニケーションの実践—小学生との活動を通じた大学生の意識調査—」, 『比較舞踊研究』, 22 : 32-42.
- Saito, Muramatsu, 2016, “A study on university students’ awareness through interactive lessons with elementary school students -Intergenerational communication through *Children’s Physical Play*”, Proceedings of 31st International Congress of Psychology, 282.
- 杉山淳一, 2005, 「e-sports 文化の現状と将来性について—コンピュータゲームコミュニティの新しい方向性—」, 『感性工学研究論文集』, 5(3) : 3-15.

パフォーマンス芸術教育における観劇実習の影響

武田るい子, 2008, 「英国のシチズンシップ教育の現状—ボランティア的シチズンシップを超えて—」, 『清泉女学院短期大学紀要』, 26 : 65-74.

武井正子, 中村恭子, 鹿島聖子, 2000, 「高等学校での運動経験の差によるダンスイメージの比較」, 『順天堂大学スポーツ健康科学研究』, 4 : 32-41.

津田和俊, 伊藤隆之, 菅沼聖, 高原文江, 朴鈴子, 山田 智穂, 2017, 「技術と芸術を横断するアートセンターYCAMの試み」, 『科学技術コミュニケーション』, 22 : 99-110.

渡部晃子, 2015, 「幼少期における鑑賞の意義：米国の鑑賞教材の分析を通して」, 『美術教育学』, 36 : 461-473.

山田 剛史, 森 朋子, 2010, 「学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割」, 『日本教育工学会論文誌』, 34(1) : 13-21.

柳田 益造, 尾花 充, 2012, 「音大における情報処理教育と工学部情報系における音楽教育」, 『システム制御情報学会誌』, 56(5) : 256-261.